

特集号「なつかしさの認知・神経基盤と機能」に寄せて

楠 見 孝

京都大学

本特集号の目的

本特集は、なつかしさ (nostalgia) 研究について、心理学における理論と実証、応用の観点から展望することを目的としたものです。

Nostalgia は、17 世紀にホームシックなどに起因するネガティブ感情を中核とする症状の病名として造られた語です。その後は、ネガティブな感情に限らず過去の出来事の想起に伴う感情として位置づけられ、人文学、社会学、マーケティングなどで研究が進められてきました。しかし、心理学的な記憶・感情研究は、体系的には進められてきませんでした (本特集号の楠見 堀・高橋、牧野論文参照)。そうした中で、2000 年代に入って、英国の社会心理学者 Sedikides, Wildschut, and Baden (2004) のグループが、ノスタルジアの喚起刺激やポジティブな機能に注目して、一連の研究を始めました。一方、日本でも、同じ頃、なつかしさの認知心理学的研究がスタートし、日本心理学会における 2 回の大会ワークショップ (楠見他, 2008, 2009)、公開シンポジウム「なつかしさの心理学：思い出と感情」(楠見他, 2011, 2012) が開催され、これらに基づく本邦初のなつかしさに関する心理学書『なつかしさの心理学：思い出と感情』(楠見, 2014) が出版されました。その後、科学研究費による「なつかしさ感情の機能と個人差：認知・神経基盤の解明と応用」(基盤 B, 代表楠見孝)、「エピソード記憶の特性と機能に関する複合的アプローチ：ノスタルジア・心理的幸福感」(挑戦的研究 (萌芽), 代表川口潤) などの研究が進められ、日本オリジナルの研究が蓄積しつつあります。

そこで、本特集は、これらの科学研究費のプロジェクトメンバーや、これまで研究を蓄積してきた研究者による成果を学界、社会に向けて発信し、この分野の研究を一層発展させることを目的としました。さらに、コメント論文は、関連領域で

優れた研究をしている研究者に依頼し、なつかしさ研究の Scope を広げることをめざしました。

この特集号のねらいは以下の 5 点です。

- (a) なつかしさ研究の意義を伝え、その根拠となる、なつかしさを支える記憶・感情の認知的、神経科学的基盤を検討する。
- (b) なつかしさのもつ機能として、精神的健康や社会的絆などに及ぼすポジティブな効果を明らかにする。
- (c) (a) と (b) にかかわる個人差・年齢差・文化差を検討する。
- (d) なつかしさの心理学研究が、文化・芸術、広告、回想法による高齢者支援などの応用研究に、どのように貢献できるのかを示す。
- (e) なつかしさの心理学について、理論と実証の最新の成果、方法論、とくにオリジナルな成果を盛り込む。

(b) のねらいは、本特集号の論文執筆中に拡大した新型コロナウイルス感染症にもかかわります。3 密回避のために、これまでの日常生活で当たり前であった人が集まる機会や、町や観光地などの賑わいが失われ、年中行事が取りやめになり、社会が大きく変わりました。人々は、不安と我慢の毎日が続ける中で、新型コロナ前の生活を思い出すことによって、なつかしさを感じ、そうした日々に戻りたいと願うようになることがあります (本特集号、三浦や佐藤のコメント論文参照、楠見, 2021)。本特集号において取りあげるなつかしさに関する心理学的知見に基づいて、日本人にとって、過去をなつかしく思うことの意義とその機能を再検討することが、この困難な状況を乗り越え、コロナ後の社会を築くための糸口を提供できるのではないかと考えました。

本特集号の構成

この「なつかしさの認知・神経基盤と機能」特集号は、8編の原著論文と7編のコメント論文を掲載しています。

前半の5編の論文は、なつかしさの認知的・感情的基盤を取り上げた論文です（以下、論文タイトルにつけた（）内の記号は、前述のaからeの特集号のねらいとの対応を示します）。

巻頭論文である楠見論文「なつかしさの認知・感情的基盤と機能—個人差と年齢変化—」(a, b, c, d, e)は、本特集の根幹にかかわる和語「なつかしさ（懐かしさ）」と外来語「ノスタルジア」、原語「nostalgia」の意味の相違を検討することから出発しています（なお、本特集号では、どの用語を使うかは、執筆者の考え方に任せています）。さらに、なつかしさの概念的特徴に基づいて、そのポジティブ-ネガティブのどの側面を引き起こしやすいのかの個人差を解明する尺度を構成しました。その結果、なつかしさによって、ネガティブ感情が喚起される傾向は、加齢により低下し、一方、ポジティブ感情が喚起される傾向は加齢で上昇することを示しています。

2編めの松田論文「単純接触効果となつかしさ感情」(a, b, c, d, e)では、刺激への長期的接触と集中提示、そして社会的勢力感を強めることが、なつかしさ喚起による単純接触効果を促進すること、その促進効果には楽観—悲観傾向の個人差が影響することを5つの実験に基づいて明らかにしています。そして、感性研究者である三浦のコメント論文「「なつかしさ」なのか？—松田論文へのコメント—」では、楠見論文と松田論文のなつかしさについての「過去に頻繁に経験し、かつ最近接触していない対象を思い出すときに伴う感情」という操作的定義が実験的検証を可能にしたと位置づけています。そして、典型的景観が複数の映像や情報に接触する中で形成されていくときに、元の画像や情報を含む文脈や物語も引き継がれるという新たな視点を示しています。さらに、なつかしさにかかわる個人や社会における長期の時間要因（個人、社会）と知覚要因（セピアや白黒などの実験データ）の重要性、そして、これらの要因を統合した研究の重要性を指摘しています。

3編めの牧野論文「自伝的記憶の美化に関する理論的説明の試み—なつかしい思い出はなぜ美的に感じられやすいのか—」(a, b, e)は、体験の自伝的記憶や歴史的過去のイメージが、時間を経て美化されるのはなぜかについて焦点を合わせています。そして、肯定的自伝的記憶と両価の自伝的記憶、歴史的過去のイメージに分けて、美的経験を説明する4つの理論（i）新実験美学、（ii）流暢性理論の応用、（iii）感情の評価理論の応用、（iv）制御焦点理論の応用に基づいて、演繹的に検討しています。単純接触効果の理論的な検討は、松田論文と関連をもっています。認知心理学の立場からの仲のコメント論文「肯定的な自伝的記憶と両価の自伝的記憶の区別について—牧野論文へのコメント—」は、理論化が難しかった自伝的記憶や歴史的イメージにおける美化の説明に切り込んだ、牧野論文の意義は大きいとしています。そして、肯定的-両価的記憶を区別して検討したことを重要としつつ、両者やその「美」を連続線上に置き、視覚、聴覚、触覚、嗅覚などの記憶、リライビング感などを変数に入れることを提案しています。

4編めの杉森論文「なつかしさの観点から論じる自伝的記憶研究」(a, b, c, d, e)では、なつかしさと関連のある自伝的記憶研究を、なつかしい自伝的記憶を喚起させる日常生活と実験室のトリガー、自伝的記憶を想起する際の気分の影響について論じています。その上で、記憶の変容に着目し、自伝的記憶を語る-聞く場面が記憶の変容に及ぼす影響となつかしい感情とのかかわり、さらに臨床場面への応用と個人差研究について展望しています。自伝的記憶研究を長年進めてきた佐藤のコメント論文「なつかしさに関する八つの疑問あるいは提案—杉森論文へのコメント—」では、（i）「なつかしさ」のタイプ、（ii）研究室の外での「なつかしさ」、（iii）子どもにおける「なつかしい」という概念の学習、（iv）「なつかしさ」をもたらす時間経過だけでなく心理的空白や、社会や個人における変動とその経験の評価や自己連続性の変化の影響、（v）個人差（忘却懸念や時間的展望の過去肯定との関連性など）、（vi）集団で感じる「なつかしさ」の重要性、（vii）「なつかしさ」のネガティブな側面、（viii）思い出を残す媒体やテレビ番組の視聴形態の変化について、問題を提起

しています。佐藤のコメント論文の問題提起は、本特集号のすべての論文にかかわると考えます。

5編目の、米田・西田論文「物語理解における時空間となつかしさ」(a, b, c, d, e)では、物語理解において読者が構築する表象の時空フレームワークが、自伝的記憶検索と共通するという仮定に基づいて、なつかしさ感情が、物語理解における時間認識に及ぼす影響を検討しています。さらに、感受性の高い(HSP)特性をもつ人になつかしさ感情を喚起させて、自己を過去から現在に位置づけることによる過剰適応予防や、時空間統合によるレジリエンス向上を議論しています。そして、精神医学者の村井のコメント論文「なつかしさ」研究の広がり—米田・西田論文へのコメント—では、第一に、回想法と「なつかしさ」を取り上げ、多様な出来事記憶の時空間的な統合的理解が「なつかしさ」とそれに随伴するポジティブ情動を誘発し、総合的意味での気分を安定させる連鎖があり、「なつかしさ」は認知と情動をつなぐ触媒の役割を果たしていることを指摘しています。第二に、読書体験においても、作者が用意した時空間フレームワークの中で、迷子にならずに時空間的文脈がうまくつながった時に感じる感情と「なつかしさ」との類似性を示唆した上で、出来事の時空間に統合された想起に(淡い)「霧」がかかり、明瞭すぎないことが「なつかしさ」と関連すると述べています。第三に、異なる文化的背景のもとで「なつかしさ」関連の諸概念が、重なり合いはあっても異なる意味で用いられることを、ポルトガル語圏の「サウダージ *saudade*」、旧東ドイツの「オスタルギー *Ostalgic*」に基づいて指摘しています。これは、楠見論文で取り上げた日本における「なつかしさ」と「ノスタルジア」の差異の問題とも関連します。

つづく2編の論文は、なつかしさへの神経科学的アプローチやそれを含む方法論について論じた展望論文です。

6編めの堀・高橋論文は、「なつかしさの神経基盤」(a, b, c, e)を取り上げた論文です。この論文では、神経画像研究として、自伝的記憶、さらに聴覚または視覚刺激を手がかりとするノスタルジアの研究をレビューした上で、ノスタルジアによる報酬系の脳領域活動に基づいて、自伝的記憶とノスタルジアを機能的に分離できる可能性を

論じています。そして、大場によるコメント論文「なつかしさを理解する神経科学的枠組み—堀・高橋論文へのコメント—」は、本論文をノスタルジアの背景にある神経活動に関する本邦初の総説として、手がかりとなる感覚刺激のモダリティを横断して自伝的記憶と報酬系の関与を示している点を評価しています。従来、感情の側面まで含むノスタルジア生起の心理学的モデルはなかったため、ノスタルジアの神経科学研究による成果であるとしています。さらに、ノスタルジアを支える自伝的記憶として、エピソード記憶と意味記憶の関与だけでなく、両者間にある意味的自伝的記憶(*personal semantics*)の神経基盤の重要性を述べています。そして、脳機能イメージング研究として、各感覚モダリティにおけるノスタルジアとその個人差研究の蓄積、複合的感情、高齢者の研究の重要性を指摘しています。

7編めの小林論文「懐かしさの喚起：喚起法、測定、個人差」(e, a, b, c)は、なつかしさ喚起の方法論からなつかしさ研究を展望した論文です。ここでは、(i) なつかしさの喚起には、なつかしい出来事の想起、なつかしい刺激の呈示、心的状態の変化などの多様なトリガーがあり、(ii) 喚起したなつかしさは質問紙、数は少ないが生理指標によって測定されること、さらに、(iii) なつかしさの喚起量や機能を調整する個人差要因について、最新の動向と留意点を議論しています。そして、木村のコメント論文「感情の喚起と測定—小林論文へのコメント—」では、懐かしさ研究と感情研究が共通に抱える喚起と測定についての課題として、(i) 感情の喚起方法と同様、喚起刺激の統制と喚起強度にトレードオフがあるため、外的刺激のデータセット作成が必要なこと、(ii) 懐かしさを測定する生理指標が欠如しているため、喚起方法ごとに懐かしさを測定する生理指標を確立するためのデータの蓄積、時間的なダイナミクスの観点を取り入れることの重要性を指摘しています。そして、懐かしさという過去志向の混合感情についての知見を既存の感情研究の中に位置づけ、理論化することが感情研究全体の発展のために必要であるとまとめています。小林論文と木村のコメント論文は、今後、なつかしさの実験的研究を展開する上で、極めて重要な指針を示していると考えます。

最後の論文は、なつかしさの応用研究を取り上げた論文です。

野村論文「高齢者における回想法のエビデンスとその限界」(d, e)では、本邦で実施された回想法による介入研究の有効性についてメタアナリシスをおこない、健常高齢者では回想法によりQOLや自尊心がわずかに改善し、認知症高齢者では認知機能や引きこもりがわずかに改善することを示しています。さらに、回想法において質的検討を通して実践者が発見した臨床の知がもつ重要性を指摘し、なつかしさ感情は回想やライフレビューにおいて過去の否定的出来事が受容や統合される際に喚起する感情であることを示唆しています。そして、回想法の第一人者による黒川のコメント論文「回想法におけるエビデンスと臨床の知—野村論文へのコメント—」は、野村論文を日本でこれまで回想法に関するシステムティック・レビューがなかった中で、極めて意義ある研究と評価しています。そして、①回想法におけるエビデンスと「臨床の知」に言及し、今後の研究の方向性に触れ、②「なつかしさ」についての高齢者の言葉を元に臨床場面での回想法となつかしさをつぎの5つの軸から論じています。すなわち、(i) 老年期の子ども時代の回想における、祖父母や親を含む他者とのかかわりの再認識、(ii) 失われたものやその痕跡が、なつかしさと寂しさと呼び起こすことの逆説性、(iii) 五感すべてがなつかしさと呼び起こす刺激となり得ること、そして(iv) 過去の複数回の接触体験が情緒を揺さぶる体験(ときどき等)であることや、(v) 1回限りの強い感情を伴う体験が、なつかしさと呼び起こすことを述べています。これらは、本特集号で述べた実証研究を支持する(i, iii, v)とともに、今後の検討課題(ii, iv)の指摘でもあります。最後の「回想法は、(中略)…「肯定的」「否定的」と二分できない複雑なニュアンスに富んだ「過去」をふりかえり、切なさ、哀しさ、喜び、嬉しさなどの思いが複雑に交錯する「なつかしさ」を味わい、「今」、「未来」に資する視点が重要と考える」というまとめは、なつかしさと回想法を橋渡しする今後の研究に向けてのメッセージであると考えます。

以上の貴重な論文を執筆いただいた先生方に感

謝いたします。また、論文に対して、コメント論文を短い時間で執筆いただいた先生方にもお礼を申し上げます。一部は第一稿の段階で、コメント論文を依頼したケースがあり、その論文が掲載論文では改稿されているケースもあることをご了承いただければ幸いです。

なお、本特集号では、論文の質の向上と活発な議論のために、オープン・ピアレビュー方式による2名の査読を取り入れました。レビューアには、論文執筆者、コメント論文執筆者、そして、高齢者心理学の専門家である長田久雄先生にお願いをしました。丁寧な査読を、多い場合には3回目までしていただいたことを感謝申し上げます。

最後に、川口潤先生には、ゲストエディターとして、本特集号の企画、編集において様々なご教示をいただきました。また、原稿を丁寧に確認いただきました編集部の鈴木朝子さんに心から感謝申し上げます。

特集号の担当編集委員を代表して 楠見 孝

文 献

- 楠見 孝(編)(2014) なつかしさの心理学：思い出と感情 誠信書房。
- 楠見 孝(2021) 新型コロナウイルス流行前へのなつかしさとなつかしさ特性：Personal Inventory of Nostalgic Experiences 日本版(PINE-J)の開発と適用 日本社会心理学会第62回大会論文集，9。
- 楠見 孝(企画)・牧野圭子・川口 潤・仲真紀子(2011, 2012) なつかしさの心理学：思い出と感情 日本心理学会公開シンポジウム 京都，名古屋。
- 楠見 孝・水越康介・瀧川真也・川口 潤(2009) ノスタルジア研究の現在：基礎的側面と応用的アプローチ(ワークショップ) 日本心理学会第73回大会発表論文集，WS(24)。
- 楠見 孝・杉森絵里子・松田 憲・瀧川真也・川口 潤(指定討論)(2008) ノスタルジア：記憶と感情，消費者行動の接点(ワークショップ) 日本心理学会第72回大会発表論文集，WS(53)。
- Sedikides, C., Wildschut, T., & Baden, D. (2004). Nostalgia: Conceptual issues and existential functions. In J. Greenberg, S. Koole, & T. Pyszczynski (Eds.), *Handbook of experimental existential psychology* (pp. 200–214). New York, NY: Guilford Press.

— 2021. 5. 13 受稿 —